

---

# 幼馴染

龍田未華

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼馴染

### 【Nコード】

N29290

### 【作者名】

龍田未華

### 【あらすじ】

逸姫には子どもの頃の記憶がない。いつの間にか、自分は孤児院にいた。けれど、そのことで寂しさを感じたことは一度もない。甘くて優しい恋人がいたから。

だが、ある日恋人は突然姿を消してしまう。傷つく逸姫だが、ある出会いにより、思いがけない真実を知る。そこには恋人とのある秘密が隠されていた。

恋人の深い愛情に気づいたとき、逸姫は？

（現在の過去編はらぶらぶ甘々で若干バカップルになっております）

## 登場人物紹介

### 【登場人物紹介】

来嶋逸姫<sup>きしまいつき</sup>… 22歳。服飾店に勤める。孤児院出身。子どもの頃の記憶がない。蓮也と結婚の約束をするが・・・

神瀬蓮也<sup>かみせはすや</sup>… 23歳。孤児院出身。難関の医大に合格する程の秀才。突然失踪してしまう。

落合胡桃<sup>おちあいくるみ</sup>… 20歳。逸姫の同僚。ふんわりとした雰囲気の子。惚れやすく、失恋ばかりしている。

島谷雪乃<sup>しまたにゆきの</sup>… 24歳。逸姫の同僚。姉御肌。

東條奏<sup>とうじょうかなで</sup>… 17歳。胡桃の想い人。

思いつきで書いていくので、その度に登場人物紹介枠が増えていくかと思えます。

## プロローグ

「逸姫！ごめん！」

そう言いながら、走ってくる男を逸姫はベンチに座ったまま静かに見つめる。

「遅い」

「ごめん、怒った？」

「怒った」

「じゃあアイスおごつてあげる」

「いらないわよ！こんな寒い日に！」

誰がこんな日にアイスなど冷たいものを食べたいものか。

辺り一面は銀世界。

街も木々もすべてに雪化粧が施されている。

地面は雪が高く降り積もり、吐き出す息は白く冷たい。

そんな日に外でアイスをもらっても嫌がらせ以外の何物でもない。

逸姫が睨むと、蓮也は飄々とした笑みを浮かべた。

「本当にいらないの？」

「いるか！」

「じゃあ何もなしね」

「ちよつと！それが狙いだっただの？！」

最初からおごりたなくてやったのか。  
こっちは寒い中待っていたというのに、なんてケチ臭い男だろう。

「今、ケチ臭いって思ったでしょ？」

蓮也がにこにこしながら、思ったことを言い当てる。  
だが、そんなことで怯む逸姫じゃない。

「実際ケチでしょ。可愛い彼女が寒空の下待ってたっていうのに」  
ずずつと鼻をすする。

すると、蓮也が手袋をした手で逸姫の頬を包んだ。  
そして、こつん、とおでこを合わせてくる。

「ごめんね？寒かった？」

「……平気」

本当に蓮也が申し訳ないと思っているのが、瞳を通して伝わってくる。

そのため逸姫はすぐに蓮也を許してしまう。  
いつもはもうしばらく膨れている逸姫だが、  
今回簡単に許したのには他にも理由があった。

「院長先生と何のお話してきたの？」

逸姫はこれがずっと聞きたくて仕方がなかったのだ。それなのに、蓮也はとぼけたような顔。

「ん？」

「進路、どうするの？」

院長先生とは、私たちを育てくれた孤児院の先生のことだ。ひだまりのように優しい、私たちにとってはお母さんとも言える存在。

この人がいたから、逸姫たちは寂しい思いをせずに済んでいる。

そして今の時期、逸姫たち年長者は進路を院長先生に必ず伝えることになっている。

何故なら、この孤児院では、18歳になれば必ず出て行く決まりだから。

そうでなければ、後から孤児の子が入ってこれないのだ。

そして、逸姫も蓮也も来年で18になる。

出て行かねばならない時が迫っていた。

もうそろそろ進路を決めなくてはいけない。

この時期は誰もが憂鬱な気分になる。

血の繋がった家族のいない者にとって孤児院のみんなは家族同然だ。そのみんなと離れなければならないのだから当然だろう。

それもこれからは何でも一人でやっていかなくてはいけない。

その不安も憂鬱な要素のひとつだった。  
逸姫自身、不安でたまらない。

だから…

せめて、

せめて、蓮也が傍にいてくれたら、と逸姫は思う。

しかし、蓮也が逸姫に進路を教えることはなかった。

今も蓮也は逸姫に微笑むだけで、何も答えてくれようとはしない。

蓮也の未来に逸姫は既に見えないのかもしれない。

逸姫は軽く失望した。

「逸姫は？逸姫は進路どうするの？」

「私？……私は、そのへんで就職する」

逸姫は雪に埋まった足元を見た。

「そつか、早く就職決まるといいね」

「うん…」

逸姫はそのまま灰色の雪を見つめ続ける。

「俺ね…逸姫に言っておきたいことがあるんだ」

その声は低く、どこか硬質だった。

逸姫は隣に座る蓮也を仰ぎ見る。

だが、蓮也のほうは逸姫のことなど見ておらず、どこか遠くを見据えている。



その表情は、どこことなく哀愁を帯びているようにも見えた。

やはり別れ話だろうか？

「なに？」

その声が震えていたからか、そこで初めて蓮也は逸姫のほうを振り向いた。

「逸姫…」

「うん…」

逸姫は蓮也の目を見る勇気がなくて、白い息が出ている蓮也の口を見つめる。

「俺、医大受かったんだ」

「えっ？」

逸姫は勢いよく顔を上げる。

「だから、俺は医者になる」

おそらくその時の逸姫は驚きで目を丸くしてたに違いない。

「医者って、蓮也が子どもの頃夢だっって言ってた？」

「そう」

「でも、でも、そんなこと言ってたのはずっと前のことで、ただの夢だとばかり…」

「あの時から、諦めてなかったんだ」

「うそ」

逸姫が蓮也の瞳を見ると嘘など言っていないことがわかる。追って、じわじわと逸姫の胸に感情が湧きあがってくる。

「すごいー!!」

逸姫はベンチから立ち上がると蓮也に抱きついた。

「すごい、すごい、すごい!!おめでとう!!おめでとう、蓮也!!」

「ありがとう」

蓮也も、嬉しそうに笑っている。

それを見ると逸姫まで嬉しくてたまらなくなった。

「蓮也、だから、よく深夜まで勉強してたのね？」

「そうだよ。ずっと、黙っててごめんね?もし合格しなかったらと思うと、恥ずかしくて言えなくて」

「そんなの、全然恥ずかしくなんかないのに!でも、実現しちゃう蓮也は本当にすごいと思うけど」

「そんなことないよ」

「それにしてもひどい！あんな哀しそう顔して言うから、誤解しちゃったじゃない！」

「ごめん、驚かせたくて」

そう言って笑う蓮也は年相応の少年に見えた。

「あとね、もういつこ逸姫に言っておくことがあるんだ」

「な、なに？」

まさか、今度こそ本当の本当に別れ話！？

逸姫が思わず身構えると蓮也は逸姫の前に膝まづいた。思いがけず真摯な瞳に出会って、逸姫はどきりとする。

「大学を卒業したら……俺と結婚してください」

蓮也の手には小さな小さなダイヤがついた指輪。見るからに高価な物ではない。

ましてや、誰かが羨むような物でもなかった。けれど…

「はい…喜んで」

逸姫の瞳から一粒の雫が流れ落ちた。

雪に照らされたダイヤは今まで見た中で、一番美しかった。



## 惚れやすい女Ⅱ 落合胡桃

雪がぱらぱらと夜空に舞う。

街の灯りに照らされて、まるで童話の世界のようだと逸姫は思っ

白い煙がそれにさらなる色を添えている。

あたかも自分がスノードームの中に佇んでいるように思える。

幻想的な美しさに思わず見入ってしまう。

「逸姫                      ！」

オーナーの呼ぶ声だ。

「はい！今行きまーす！」

（しまった。まだ仕事の途中だった。）

逸姫はごみを捨てると、急いで暖かい店内へと戻る。

あれから5年の月日が流れ、逸姫は22歳になった。

現在は服飾店で働いている。

あれほど不安だったのが嘘のように毎日がとても充実している。

服を仕立てるのは大変だが、すごく楽しい。

加えて、優しい店長に、気のおける同僚たちと人間関係にも恵まれていた。

これ以上ない環境だ。

不満な要素は何もない。

「逸姫ちゃん、一緒に帰ろ？」

同僚の胡桃ちゃんくるみが鞆を持って立っていた。

私は、ちよつと待ってて、と返事をかえすと、急ぎ帰り支度をして胡桃ちゃんのもとへと駆ける。

胡桃ちゃんは私より少し年下で、ふんわりとした雰囲気をもった女の子だ。

とても優しく、孤児院出身の私に対しても見下した態度を取ったりしない。

ただちよつと惚れっぽいのが玉に傷だけれど、それ以外に欠点らしいところは見当たらない、気配り上手の可愛い女の子。

胡桃ちゃんとはお店で一番、仲が良かった。

「ねえ、ねえ、逸姫ちゃん！」

「なあに？」

「あのね、この前お店番してた時にすっごく素敵な人がいたの！」

「……………またですか。」

「逸姫ちゃんにも会わせてあげたかったあ。何ていうのかなあ、優しい王子様みたいな人なの」

「……………貴女は人生で何人の王子様に会っているのですか。お姫様でもそんなに会わないって。」

「でね、でね、胡桃、その人のこと好きになっちゃったみたいなの」

「……………でしょうね。」

「だから、ね？協力して？」

私は女だから、貴女のうるうる上目遣いは通用しません！

だが、胡桃ちゃんは案外しぶとい。

「逸姫ちゃん、お願い！今度こそ、間違いなく運命の人なの！」

そんな安い運命があるか！

これは一回、がつん、と言ってやらねば。

「胡桃ちゃん、そう言っつて、この前も失恋してたよね？」

「う…でも、誰にも迷惑」

「かけてないからいいじゃない、とか言いつつ、いっつも人の家で大泣きして、やけ食いしてくよね？」

「ごめ…だ、だけど、いつもじゃ」

「そんでもって、毎回いい様に遊ばれて、貢がされた挙句、捨てられてるよね？」

「こ、今度の人は優しそうな人だから、大丈夫！」

「貢いだ男も顔だけは優しそだったよね？」

「……………そうだったけ？」

この娘は。

「そうだったでしょ！もう！毎回、顔だけ男にひっかかって、痛い目見てるのにまだわかんないの！？」

「いやあ！逸姫ちゃん、髪の毛ぐしゃぐしゃにしないでえ！」

私は胡桃ちゃんの頭をぐりぐりとかき回す。

そつでもしないと、自分の気が収まらなかった。



胡桃ちゃんは涙目で自分の頭を直している。  
その姿に反省の色はあまりない。

まったく、もう！

いつか変な男に売られても知らないからね！

私は怒りのせいか、少々速足でずかずかと前を歩く。

「わかつたら、その男の人は諦めなさい。胡桃ちゃんは男を見る目  
ないから、私が今度いい友達紹介してあげる」

「……や」

こやつ。

私が振り返ると、胡桃ちゃんはびくつと体を竦ませ、頭を手でおさ  
えた。

どうやら、またぐりぐりされるところだらしい。  
その予想は概ね当たっていたが。  
ちっ。

……まあ、でも。

どうせすぐに他の人好きになるだろうし。

「もう勝手にすれば？」

胡桃ちゃんは惚れやすいが、熱が冷めるのもまた早い。  
だからこそ、たいした被害もなく、今まで無事だったとも言える。

諦めにも似た気持ちで、ざくざく、と歩を進めていると、いつの間にか背後の足音が止まっているのに気づいた。

「胡桃ちゃん？」

「…違う」

「え？」

「今度の人は違うの」

何が？

「いつもは顔だけ見て、この人いいなあって思ってたけど、今度の人は違うの」

胡桃ちゃんは俯いており、表情が見えない。  
いつもとどこか様子が違っていた。

「何が？」

「……その人ね、何だか、哀しそうな目の人だったの。その瞳が印象的で、目が離せなかった。いつもみたいに、ただ好きっていうだけじゃなくて、守ってあげたいって初めて思ったの」

だから協力してほしい、そう告げる胡桃ちゃんの瞳は今まで見たことがない意志の強い女の目をしていた。



## 最恐の姉御〃島谷雪乃

「それで、協力するって言っちゃったのお!？」

「……はい」

「ばっかじゃないの!?!？」

「……すみません」

逸姫は雪乃ちゃんの剣幕に思わず謝っていた。

雪乃ちゃんは胡桃ちゃんと同じく同僚で

お店では胡桃ちゃんも含めて3人ぐるみで仲がいい。

お店に入ったときからそれは変わらない。

私たち3人は店で一番の仲良しで、  
いつも一緒にいる。

この3人の中でもとりわけしっかりしているのが雪乃ちゃんなのだ。

「で、でもね?今回は本当にいつもと違って真剣だったのよ?」

「それでろくでもない男だったらどうするのよ!？」

「そ、そしたら、諦めさせるし」

「あの胡桃がそう易々と諦めるわけじゃないじゃん!熱が冷めるまでは、  
とことん突き進むタイプなんだから!」

……そうでした。

胡桃ちゃんは見ただ目ふわふわしている割に、中身は頑固なのだ。

「でも、いつも通りなら、熱が冷めるのも早いし、平気じゃない？」

途端、雪乃ちゃんの鋭い眼光とぶち当たる。

「あんた……それ本気で言ってる？」

ひいひいひいひいひいひいひいつ！

地獄の底から聞こえてきそうな重低音に思わず身震いする。

「本気ならいいわよ？その代わり私は一切関与しないから」

「ゆ、雪乃さまあああああ！それだけはご勘弁を！」

そんなの怖すぎるー！

雪乃ちゃんなしで胡桃ちゃんの暴走を止めるなんて、不可能だ！  
地獄絵図にしかない！

「ほら、みなさい。あんただって、本気で思っていない癖に」

「つぐつ」

いや、決して本気で思っていないわけじゃないんだよ？

だだ、胡桃ちゃんがいつになく真剣だったから大丈夫かってつい…

「あんたが余計なことしたせいで、今回は止めるの苦労するわよー

「？」

「…………ごめんなさい」

思わず、しょぼん、とする。

「……まあ、過ぎたこと言ってもしょうがないわね。対策を考えましょうか」

そして、ぼんぼん、と私の頭を撫でる。

「雪乃ちゃん……」

雪乃ちゃんってこういう人だ。

基本さはさはしていて、必要以上に怒ったりしない。  
相手が非を認めれば、それ以後そのことについては一切口に出したりしないのだ。

また、困っている人を見ると放っておけない姉御肌でもある。

「雪乃ちゃん！」

「わあ！何よ！？」

勢いよく抱きつき、お腹に頬ずりする。

「大好き！」

「……はいはい」

雪乃ちゃんは溜息まじりだ。

だが、私の心はほかほかしていた。

私は本当に友達に恵まれている。

私たちはおしゃべりもそこに縫製の作業に入る。

なんといっても今の時期は仕事が多い。

今年の冬は一段と寒くて、冬物を頼む人が急増したのだ。

そして今日は胡桃ちゃんは休日のため

私と雪乃ちゃんの2人で縫製作業に取りかかる。

「そういえば……ねえ、逸姫」

「うん？」

忙しいため

作業を止めずに返事だけ返す。

「まだ、彼から連絡ないの？」

思わず手が止まる。

「…うん」

「そっか……、ごめん」

雪乃ちゃんを見ると申し訳なさそうに顔をしかめていた。

私は黙って、首を振る。

雪乃ちゃんが悪いわけではないのだから。

逸姫の婚約者だった神瀬蓮也は2年前、突然姿を消してしまった。

誰にも、何も、言わず。

逸姫はすぐに搜索願いを出した。

だが、一向に見つかる気配はない。



何か事件に巻き込まれたのではないか、と逸姫は心配でたまらなかった。

蓮也が死んでいたらどうしよう、と最悪の考えばかりがずっと頭を支配していた。

だが、1か月経っても、3か月経っても、何の手掛かりも出ない。

その辺りから、警察は事件性を疑い始めた。

自分で姿を消したのではないか、と言うのである。

そんな筈はない、と逸姫は憤った。

けれど……良く良く考えてみると、確かに、蓮也は消える前に様子がおかしかったことにその時初めて気がついた。

それから、2年の月日経っている。

未だ、蓮也は見つかっていない。

「ごめん、逸姫。思い出させて……」

「そんな、もう2年も前のことなんだし。気にしてないよ」

「そう？……あ！来たわよ！胡桃が！」

振り向くといつの間にか胡桃ちゃんが入り口に立っていた。  
それも、相当機嫌が良さそうだ。  
今日は休日のはずなのに、どうしたんだろう？

「うふふふふー」

「…何よ、気持ち悪いわねえ」

雪乃ちゃんが、思わずと言った感じで顔を顰める。

だが、胡桃ちゃんは気にせず続けた。

「聞いて、聞いて！今日あの人とデートすることになったんだあ！」

「はあああああああ！？」

私も雪乃ちゃんも驚きにあんぐりと口を開ける。

なんだ！

その急展開は！

「早すぎるでしょ！一体いつ、どこで会ったのよ！？」

「さつき、道端で偶然。もう、これは運命よね？」

胡桃ちゃんは既に目がハートだ。

「どうして、いきなりそんな話になったのよ!？」

それは私も聞きたい。

「えー？それは、ひ・み・つ」

今、確実に語尾にハートマークがついていた。

……そして、雪乃ちゃんの眉間には青白い怒りのマークがはっきりと見える。

「どこで会ったの？」

「ん？その喫茶店だよ」

ふーん、と雪乃ちゃんは考え込んだ。

そしてしばらくして

にこつと笑つと朗らかに告げた。

「そう。そのデート、私たちもついて行くから」

「ええええええええ!？」

今度は、私と胡桃ちゃんが驚きに目を見開く。

「何でしょう!せっかくふたりっきりのデートなのにいい!」

私も何故と問いたい。

「あんだ一人じゃ心配だから私たちがついて行ってあげるんじゃない」

「わ、私も？」

小声でぼそつと呟くと雪乃ちゃんがゆっくりと振り向いた。

「いやなの？」

「……いえ、是非行かせて下さい」

今、雪乃ちゃんの背後に吹雪が見えたのは決して私だけじゃない筈だ。

## いけすかない男Ⅱ東條奏

そして、今、喫茶店にも猛吹雪が吹いていた。

（きまづい……）

喫茶店の一角だけ

奇妙な静けさに包まれている。

まるで吹雪で耳を塞がれたような  
冷たい静かな時間が流れている。

（きまづすぎる……）

逸姫はあまりの居心地の悪さに  
ひたすら目の前のコップを見つめた。

遡ること40分程前。

胡桃ちゃんについてきた私たちは  
喫茶店に腰を落ち着け、胡桃ちゃんの  
意中の相手が来るのを待っていた。

その間、何度も雪乃ちゃんと胡桃ちゃんとの間で  
言い争いが続いたが、  
結果的には胡桃ちゃんが折れた。

そうした末にやっと御対面した

胡桃ちゃんの恋焦がれる相手（すぐに他人に戻る可能性大だが）

その人は東條奏と名乗った。

見た目は驚くことに

………普通だった。

失礼かもしれないが、

だが、本当に平凡な容姿の人だった。

今までの胡桃ちゃんのタイプとは正反対。

これには雪乃ちゃんも私も驚いた。

もっと派手で、軽い、美形の男を想像していたのだ。

それに比べて今回はあまりに地味な顔立ちと言わざるをえない。

しかし、東條奏は平凡な中にも上品さが漂っており、貴族の子息であることを伺わせる顔立ちをしていた。

また不思議と目を惹く雰囲気を持っている。

物悲しいような、柔和なような、それでいて壊れそうな…  
そして、なんとも言えない妖しい色気を持った男だった。

私と雪乃ちゃんは始めぼかんとしていたが、

胡桃ちゃんは早速目をハートにして話しかけていた。

真っ赤な声で一生懸命に胡桃ちゃんが話すのを

東條奏は穏やかに聞いている。

一見すると微笑ましいカップルの光景。

だが、何故だろう？

逸姫は先程から冷や汗が止まらなかった。

時折、言葉に言い表わせない鋭さで逸姫を射抜くように見ている気がしてならないのだ。

東條奏と会ったのはこれが初めての筈なのに。

何故そんな目で私を見るのか。

そして、逸姫自身、初めて会った気がしないのは、どうしてなのか。

逸姫の頭の中で警鐘が鳴り出したとき…

ばしゃっ、と

雪乃ちゃんがコップの水を東條奏にぶっかける音が辺りに響いた。



## 車輪の音

そうして振り出しに戻る。

今、あたり一面氷を張ったように  
しーん、と静まり返っている。

（き、きまずい……）

ずっと考え事をしており、3人の会話を聞いていなかった逸姫は  
きまずさに顔を伏せるしかない。

（なに！？なにが起こったの！？）

雪乃ちゃんは顔を真っ赤にして怒っており、  
胡桃ちゃんは呆然とした顔をしている。

東條奏はといえば、

これ以上ない程の冷たい眼差しで口を開いた。

「……あのさあ、これ高いんだけど？」

そう言って胸元の服を引っ張るように見せる。

「引っかけたのは水よ！そんなことより胡桃に謝りなさいよ！」

「何で、僕が謝らないといけないの？」

東條奏は、付き合ってらんない、とばかりに目線を余所にやる。

その態度にますます雪乃ちゃんは激昂する。

「何が胡桃は頭の悪い尻軽女よ！？失礼じゃない！」

そ、そんなことを言ったのか。

この男は。

若干話についていけず、呆然していると。

「……失礼？」

東條奏の口元が嘲笑に歪んだ。

「事実を言ったら失礼になるのか？」

「んな……っつ！」

雪乃ちゃんは怒りで顔を染め、東條奏に掴みかかろうとした。  
しかし、

「……やめて」

静かに響いたその声に雪乃ちゃんは動きを止める。  
逸姫も声の主に顔を向けた。

胡桃ちゃんは哀しそうな笑みを浮かべて、雪乃ちゃんを見た。

「いいの。事実だし」

「な、なに言って」

「東條さん」

胡桃ちゃんは雪乃ちゃんの声を遮って、静かに話しかけた。

「今日はこれで失礼しますね……」

対して東條奏は興味のなさそうな顔で返事はおろか身動き一つしなかった。

「雪乃ちゃん、逸姫ちゃん、いこ」

胡桃ちゃんは音も立てずに立ち上がると  
につこり笑って

先に出口へと向かい始めた。

「く、くるみ」

慌てて雪乃ちゃんが後を追う。

逸姫は展開の早さについて行けず、  
一瞬ばうつとしたが、すぐに我に返ると  
2人を追いかけようと足を踏み出した

が、強い力で腕をひかれ、危うく後ろに倒れそうになる。

なんとかその場に踏みとどまると、  
腕の先へと視線を向けた。

「な、なんですか？」

そこには最初の時のように鋭い瞳で逸姫を射抜く東條奏がいた。

逸姫はあつと息を飲み、  
吸い込まれるようにその瞳から目が離せなくなった。

それから何秒立ったろう。

恐ろしく時間が過ぎたような一瞬後。

東條奏がようやく口を開いた。

「……逸姫さん、だったよね？」

「そ、そうですが……」

そこでもうやく東條奏は満面の笑みを見せた。  
その笑みは妖しい美しさを湛えていて、逸姫は知らず目を奪われる。

「また、会えないかな？」

遠くでカラカラと回る馬車の音が聞こえた。

## 濃霧

なんだっただろう、あの人は。

どこかで会ったことがあるような気がするのに、  
濃い霧に阻まれて答えに辿り着くことができない。

それが逸姫にはもどかしい。

頭の奥では思い出せばいけないと警鐘を鳴らしているようであり、  
反対に今思い出さなければ後悔するような気もする。

何か重要な鍵をあの人が握っているように思えてならない。

もしかして、逸姫自身が記憶のない子どもの頃に会ったことがある  
のだろうか？

だが、もしそうだとしたら、あの人は何故そのことを何も言わない  
のか。

もしや…私が記憶のないことを知っている？

純粹に、知りたい、と逸姫は思った。

過去の自分を東條奏が知っているのなら知りたい、と。

今までずっと記憶のないことを不思議に思っていた。  
だけど、蓮也は思い出す必要はないと、

逸姫が思い出そうとすることを殊更嫌がった。

それに逸姫自身、

何故か思い出してはいけないような気がしていた。

だから、過去の自分に対して

何の興味もなかった。

蓮也がいれば、ただそれだけで良かったから。

でも、今、純粹な好奇心が逸姫の中で生まれていた。

何故、記憶のないまま、12歳のときから孤児院へいたのか。

12歳まではどうやって暮らしていたのか。

パパは？ママはどうしたのか？

東條奏に会えば、そのすべてがわかるだろうか？

「逸姫」

ん？と振り返ると雪乃ちゃんが顔を曇らせて立っていた。

「逸姫、大丈夫？この前から何だかぼーっとしてるけど」

逸姫は心とは裏腹に、何でもない、と笑う。

「そう？ならいいんだけど……胡桃もあれから様子がおかしいし」

不安げに雪乃ちゃんは目を伏せる。

「胡桃ちゃん、あれからどう？」

「あんなこと言われたのに全然諦める気ないみたい」

そうなのか。珍しい。

「胡桃って惚れっぽいけど、切り替え早いでしょう。でも今回はちょっと違うみたい。逸姫の言うとおり、今回は本気なのかも」

あんな男じゃなきゃ大歓迎なんだけど、とぼやく雪乃ちゃんと笑いながら店を出る。

「笑い事じゃないわよ、逸姫」

「ごめん、ごめん。でも雪乃ちゃんがついてたら、変なことにはならないんじゃない？」

それもそうね、と胡桃ちゃんを叱る気満々の雪乃ちゃんが言う。



実際、胡桃ちゃんが相手の男に貢いだと言っても本当に少額で、高額なものを貢ぐ前に雪乃ちゃんが事前に全部防いでいた。

ただ、それからしばらく胡桃ちゃんを宿めるのが大変なのだ。

だから、今回もそれぐらいで、多分大丈夫だろう。

最後には雪乃も逸姫も軽い足取りで家路に着いた。

## 再びの轍

「こんにちは」

カラン、という涼しげな音と共に

さわやかな笑顔を浮かべた男

東條奏が目の前にいた。

「……いらっしやいませ」

店番をしていた逸姫は常套句を口にするしかない。

心中では、

よく店に来れるな、とある意味感心していた。

「追加でもう一着タキシードを仕立てたいんだけど」

その言葉に逸姫は、頭を下げ、礼を述べる。

この服飾店“ル ムーラン ルージュ（赤い風車）”では

東條奏の言うとおり、仕立て屋も兼ねており、男性もよく訪れる。

正式な礼服の燕尾服やイブニングドレス、準礼服のタキシード、ガウンなど注文は様々だ。

だが、大概は主人自ら注文に来ることはあまりない。  
ほとんどが下僕などだ。

自分と背丈の同じ使用人を来させて、採寸にも来ない貴族も多い程だ。

……ということは東條奏は貴族ではないのだろうか？

この前も自ら注文に来ていたようだし。

「採寸はいかが致しましょうか？」

「今、お願いできるかな？」

「畏まりました」

採寸のための部屋へ案内すると、「失礼します」と

断りを入れて採寸を始める。

東條奏は大人しくそれに従った。

しばらくゆったりとした時間が流れる。

逸姫は仕事に徹し、順序よく採寸していく。

それをしばらく東條奏は静かに見ていたが、やがて口火を切った。

「ねえ、逸姫さん」

「…何でしょう？」

緊張しつつ、東條奏を見上げると、

あの時と同じ妖美な笑みで逸姫を見ていた。

その笑みに逸姫は、どきつとする。

「この後、お茶しない？」

……………ただのナンパ男だよ。

逸姫は心のなかで溜息を吐く。

「お茶しない？」という言葉は今までうんざりする程聞かされたナンパ言葉と寸分も変わらない。

いまだき流行んねーよ、とあくまでも胸の奥底で悪態を吐く。

この男が逸姫の昔のことを知っていると聞いたのはただの勘違いだったのか。

「仕事がありますので」

「もちろん、仕事の後でいいからさ。何時に終わるの？」

妖しく思えた笑みも今はただ、にやにやしているようにしか見えな  
い。

あの微笑は目の錯覚だったのか。

完全に軽いナンパ男だ。

胡桃ちゃんにもこんな感じで声をかけたんじゃないだろうか。  
それであっさり自分に乗り換えるとは。

失望や軽い怒りを覚えたものの、仕事中的手前、  
なんと答えたものか迷った。

「来てくれたらなんでも好きな物買っただげるよ」

「いいません」

こいつ、私を愛人にでもするつもり？

怒りがふつつつと湧いてくる。

「ねえ、少しくらいいいじゃない。何か用事でもあるの？」

「ええ、まあ…」

ここはやりわり断るしかない、と曖昧に答えておく。

「何の用事？その用事のあとでもいいよ」

しつけー。

嫌がつてるんだから察しろよ、と胸中で顔をしかめた。

だが、決して面には出さない。

就業時間中の今は相手はあくまでも大事なお客様だ。  
逸姫は曖昧な笑顔で対応した。

しかし、心中では

さてどうやって断ろうか、と考えを巡らせていると…

「ふうん。自分の過去が知りたくないの？」

いきなり投げられた爆弾に逸姫は目を見開く。

それを見て、東條奏は口角を釣り上げた。

「ねえ、お茶しようよ」

その三日月に細められた瞳は、蠱惑的なこがね色で輝いていた。

それを見て思い出す。

そういえば…

蓮也が失踪したのもこんな色合いの葉が舞い散る秋だった

と、逸姫はぼんやりと思った。

## 再びの轍（後書き）

次から、しばらく過去編です。  
行きあたりばったりですみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2929o/>

---

幼馴染

2011年1月28日14時29分発行